

## 鹿児島県喜界島小野津方言

白田理人

## 1 はじめに

奄美語喜界島方言（以下喜界島方言）は、鹿児島県大島郡喜界町で話されている方言である。喜界島には30余の集落があり、語彙面・音韻面・形態面に渡る集落差が見られる。小野津（おのつ）集落<sup>1</sup>（以下地図参照）で話される方言（以降小野津方言）を含む北部諸方言は、中舌母音を持つ点で中南部の諸方言と異なる（平山ほか1966, 上村1972・1992, 中本1976, 松本2000, 大野2002・2003, 木部2011・2012）。本稿では筆者が現地調査<sup>2</sup>で得たデータに基づき、小野津方言を対象に、動詞・形容詞の活用、小野津方言による童話「うふかぶー（おおきなかぶ）」及び会話例を報告する。

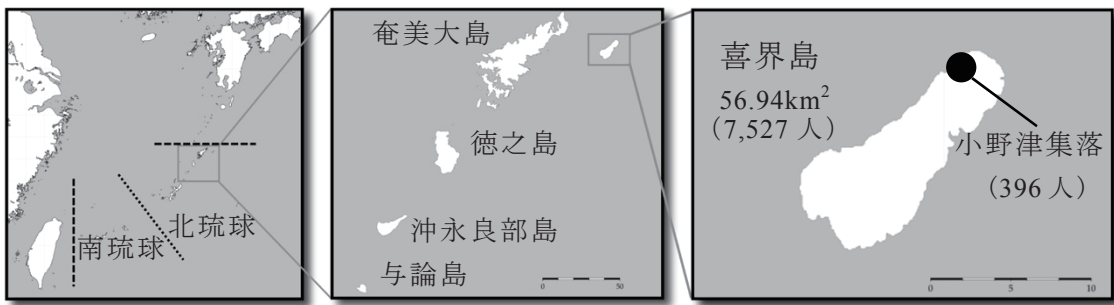


図1 琉球列島／奄美群島／喜界島／小野津集落の位置<sup>3</sup>

## 2 前提

本節では、次節以降の前提として、まず2.1で小野津方言の音韻体系の概略について述べる。次に、2.2では異形態の交替の分析に関して本稿が採る立場について述べる。

<sup>1</sup> 方言名は unucu [unutsu] である。神宮（かみや、方言名 hamya [hamʲa]）と前金久（まえがねく、方言名 mēnuku [mʲe:nukʲu]）の二つの行政地区からなる。

<sup>2</sup> 小野津集落出身・在住の70代女性2名（梅田明子氏：昭和12年生、田畑繁子氏：昭和20年生）を調査協力者とした聞き取り調査である。本稿には、文化庁プロジェクトの調査で得たデータに加え、JSPS 科研費 15J02695「北琉球諸語の文法記述・ドキュメンテーション及び歴史的研究」の助成を受けて行った調査で得たデータも含まれる。なお、活用の調査のための語彙項目の選定に当たって上野（1995）を参考にした。

<sup>3</sup> 本稿では、国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏が作成した地図を適宜加筆・編集して用いている。（ ）内は喜界町役場発行の資料に基づく2015年4月現在の人口である。

## 2.1 音韻体系について

以下に、本稿で用いる表記により、小野津方言の母音音素一覧を示す。[ ]内は音声実現である。音声上の長母音、二重母音は、短母音の連続として解釈する(例 *mii* [m<sup>h</sup>i:]「見ろ」、*utai* [utai]「歌い(不定形)」)。前舌母音と中舌母音の対立があるのは両唇音あるいは軟口蓋音に後続する場合のみであり、歯茎音／歯茎硬口蓋音／声門音の後に前舌母音は分布するが中舌母音は分布せず、唇軟口蓋音の後に中舌母音は分布するが前舌母音は分布しない。中舌母音と前舌母音の(音声上の)相違は、母音自体の調音位置ではなく先行する子音及び子音から母音への渡りにある。前舌母音に先行する子音は口蓋化し(例 *mii* [m<sup>h</sup>i:]「見ろ」、*iki* [ik<sup>h</sup>i]「行き(不定形)」、*amee* [am<sup>h</sup>e:]「網は」、*k<sup>h</sup>heeti* [k<sup>h</sup>e:ti]「来ました」)、中舌母音に先行する子音は口蓋化せず、両唇音の場合は軟口蓋化する(例 *mii* [m<sup>v</sup>i:]「目」、*iki* [ik<sup>v</sup>i]「行け」、*am<sup>v</sup>e* [am<sup>v</sup>e:]「網は」、*k<sup>h</sup>heeti* [k<sup>h</sup>e:ti]「掛けた」)。構造主義的に立てる音素としては、母音の対立／子音の区別のどちらの解釈も可能であるが、本稿では先行研究に従って母音の対立として解釈する<sup>4</sup>。

表 1 母音音素一覧

	前舌	中舌	後舌
狭	i	ĩ	u
半狭	e	ě	o
広	a		

次に、本稿で用いる表記により、次頁の表に小野津方言の子音音素一覧を示す。借用語には以下に加えて子音音素として š[ɕ], ɟ も見られる。[ ]内は音声実現である。異音について、p<sup>h</sup>, dz, dz はそれぞれ母音間で摩擦音[ɸ], [z], [z]で現れる。p<sup>h</sup>については老年層(80代以上)を除いては語頭(特に円唇母音 u, o の前)においても[ɸ]で現れることがある。無声摩擦音 s, h は i の前で口蓋化しそれぞれ[ɕ], [ɟ]で実現する。音節構造は(C)(y)V(V)(C)である。y に先行するオンセット子音は両唇音または軟口蓋音に限られる。母音及びコーダ子音はそれぞれ一モーラの長さを持つ。音節末子音は鼻音／阻害音の区別のみが弁別的であり、調音点の対立がなく、後続する子音に調音点が同化する。阻害音の連続の場合は重子音として解釈するが、音節末子音は音的に破裂音／破擦音の前で無声閉鎖音で(例 *abba* [aɸba]「油」、*muččii* [mut<sup>h</sup>ɰtci:]「餅」、*kujja* [k<sup>h</sup>ut<sup>h</sup>ɰdza]「鯨」)、摩擦音の前では摩擦音で現れる(例 *hassaŋi* [hassaŋ<sup>v</sup>i:]「髪の毛」、*assi* [aɕci]「そう」)。語末のコーダ子音としては鼻音のみが分布し、[ũ]~[ɲ]で現れる。語末及び形態素末の音節末鼻音は n と交替する<sup>5</sup>ため音素としては n を立て、形態素中では音声実現に応じて m, n, ŋ を用いて表記する。

<sup>4</sup> 服部(1959:284)は、子音の対立として解釈している。

<sup>5</sup> 例として、*kin* [k<sup>h</sup>iŋ]「着物」、*kinoo* [k<sup>h</sup>iŋoo]「着物は」、*dzin* [dzin]「膳」、*kurudzinuu* [k<sup>h</sup>urudziŋu:]「黒膳」、*numan* [numaŋ]「飲まない」、*numanu* [numanu]「飲まない(強調形)」などがある。

表 2 子音音素一覧

		両唇	歯茎	歯茎硬口蓋	軟口蓋	唇軟口蓋	声門
破裂音	無声無気	p[pʰ]	t[tʰ]		k[kʰ]	kʷ[kʰpʰ~kʰw]	
	無声有気	pʰ[pʰ~ϕ]	tʰ		kʰ		
	有声無気	b	d		g[g]	gʷ[gʰb~gʷ]	
破擦音	無声		c[ts]	č[tɕ]			
	有声		z[dz~z]	ʝ[dz~z]			
摩擦音	無声		s				h
鼻音		m	n	ɲ	ŋ		
弾音			r[r]				
接近音				y[j]		w	

## 2.2 形態音韻論的分析の方針

小野津方言の動詞語幹と接辞の境界では異形態の交替が見られる。例えば、以下のよう  
なデータに対し、(1), (2), (3)それぞれの語例の共通部分は *iji-*, *nu-*となるが、これらを語幹  
として取り出すと、残りの部分は非過去が *-yui*, *-myui*, 過去が *-ti*, *-di* となり、接辞にそれぞ  
れ二つずつの異形態を認めることとなる。一方、語末の共通部分を接辞として取り出すと  
非過去が *-yui*, 過去が *-i* となり、語幹について(1)が *ijir-*, *ijit-*, (2)が *num-*, *nud-*のよう  
にそれぞれ二つずつの異形態を認めることになる。

- (1) a. *ijiyui* 「出る」 b. *ijiti* 「出た」 (2) a. *numyui* 「飲む」 b. *nudi* 「飲んだ」

このような異形態の交替の分析に関して、大まかに二つの立場がある。一つは、異形態  
を分布によって説明する構造主義的な立場である。もう一つは、基底形から（弁別素性を用いた）規則により表層形を導き出す生成音韻論的な立場である。この二つの立場の違い  
が大きく現れるのは、音韻論的不透明性（opacity）が見られる場合である。不透明性は規則  
による説明でいうところの「反奪取順序（counterbreeding order）による過剰適用（over-  
application）」の場合と「反供給順序（counterfeeding order）による過少適用（underapplication）」  
の場合に見られる。上の(1), (2)の異形態を例にとると、規則による分析では、次頁(3)のよ  
うな基底形、規則及び適用順序により、(4)のように説明される。次頁の規則中の C は子音、  
C[+voice]は有声子音、C[+labial]は両唇音、C[+coronal]は歯茎音、ϕ は分節音なしを表す。  
すなわち、(i)は有声子音に後続する t が d と交替する規則、(ii)は歯茎音に先行する両唇音  
が削除される規則である。規則の適用順序として、(i)は(ii)に先んじて適用される。もし順  
序が逆の場合は(5)に示すように、(ii)の適用により m が削除され、(i)が適用されなくなる。  
(ii)→(i)のような順序は規則の適用環境を奪う順序であり、奪取順序（bleeding order）とい  
う。(i)→(ii)のような順序はその逆の順序であるため、反奪取順序（counterbleeding order）  
と呼ばれる。反奪取順序の場合、規則 x の適用をもたらした条件（音環境）がその後に適  
用される規則 y により削除されるため、表層では規則 x が適用される条件が満たされてい

ないにも関わらず規則 x が適用されている。一見すると規則が過剰に適用されているため、これを過剰適用 (overapplication) という。過剰適用が見られる場合、「過去接辞-ti の異形態-di は m の直後に分布する」といった音環境による分布の説明ができない。このため、分布による説明では「非過去接辞が後接する語幹は num-, 過去接辞が後接する語幹は nud-である」のように、分布を語彙的な条件で説明する必要が生じる。

(3) 基底形 : /ijj-i-, /num-/, /-yui/, /-ta/

規則 : (i) t → d / C[+voice]-\_ (ii) C[+labial] → φ / \_C[+coronal]

規則の適用順序 : (i) → (ii)

(4)                      規則(i)                      規則(ii)  
/num-/ + /-ti/      →      numdi      →      nudi

(5)                      規則(ii)                      規則(i)  
/num-/ + /-ti/      →      nuti      →      \*nuti

次に、以下(6), (7)の異形態を例にとると、規則による分析では、以下(8)のような基底形、規則及び適用順序により、(9)のように説明される。(iii)は i に先行する t が口蓋化して ċ になる規則、(iv)は t に後続する ĩ が i になる規則である。規則の適用順序として、(ii)は(iv)に先んじて適用される。もし順序が逆の場合は(10)に示すように、(iv)の適用により t と i の連続が生じ、(iii)が適用されて t が ċ になる。(iv)→(iii)は、規則の適用環境を与える順序であり、供給順序 (feeding order) という。(iii)→(iv)はその逆の順序であるため、反供給順序 (counterfeeding order) と呼ばれる。反供給順序の場合、規則 x の適用後にその後に適用される別の規則 y により新たに規則 x を適用できる音列が生じるため、表層では規則 x の適用可能な音列が残ってしまう。一見すると規則の適用が不十分であるため、これを過少適用 (underapplication) という。過少適用が見られる場合、「語幹 ut- (打つ) の異形態 uċ-は i の直前に分布する」といったような音環境による分布の説明ができない。このため、上述の過剰適用の場合と同様、分布による説明では「命令接辞が後接する語幹は ut-, 不定接辞が後接する語幹は uċ-である」のように、分布を語彙的な条件で説明する必要が生じる。

(6) a. numi 「飲み (不定形)」      b. numĭ 「飲め」

(7) a. uċi 「打ち (不定形)」      b. uti 「打て」

(8) 基底形 : /num-/, /ut-/, /-i/, /-i/

規則 : (iii) t → ċ / \_-i

(vi) ĩ → i / t-\_

規則の適用順序 : (iii) → (vi)

(9) 規則(iii)  
/ut-/ + /-i/ → uči

規則(iv)  
/ut-/ + /-i/ → uti

(10) 規則(iv) 規則(iii)  
/ut-/ + /-i/ → uti → \*uči

ここまで見てきたように、規則を用いた場合、基底形の分節音の条件のみから異形態を説明できる場合であっても、過剰適用もしくは過少適用が見られる場合には、分布による説明では分節音の条件のみからは異形態の分布を説明できず、接辞の機能を条件に含める必要が生じる。また、規則による説明では、弁別素性を用いることにより異なる分節音の交替も統一的に説明できる (t<sup>h</sup>ub-「飛ぶ」の交替について以下(11)参照)。このように、説明の経済性の観点からは、分布による説明よりも規則による説明の方が優れている。

(11) 規則(i) 規則(ii)  
/t<sup>h</sup>ub-/ + /-ti/ → t<sup>h</sup>ubdi → t<sup>h</sup>udi

しかしながら、規則による説明は分布による説明に比べて音韻論の知識をより多く必要とし、当該方言の教育活動には不向きである。本プロジェクトは継承活動に利用可能な資料をアーカイブ化することを想定したものであるため、規則による説明はプロジェクトの趣旨とは合致しないと考えられる。このため、本稿では、経済性の点で劣るものの、より平易で教育活動にも適した分布による説明を採り、動詞に複数の語幹（異形態）を立て、後続する接辞（の意味機能）を条件として語幹の分布を説明する。ただし、分布の条件を音環境によっても語彙的条件によっても記述できる場合には、説明原理としては音環境の方を優先する方針とし、隣接する形式の機能による異形態の交替は可能な限り少なくする方針とする。なぜなら、語形の予測に関して、語幹及び接辞の音形が分かっていることは必要不可欠であり、さらに語彙的な条件を必要とする説明よりも、音形のみから予測できる説明の方がより経済的であると考えためである。例えば、以下(12), (13)の異形態に対して、分布による説明としては(14)と(15)が考えられる。(13)では動詞「見る」の語幹に関して、後続する接辞の機能に応じて二つの異形態が生じている。(14)では否定接辞に関して先行する語幹末の分節音に応じて二つの異形態が生じているものの、動詞「見る」の語幹については異形態の交替を認めずにすんでいる。本稿の立場では、語彙的条件による交替の少ない(15)のような分析の方が優れていると考える。

(12) a. ijiraa 「出ない」 b. ijiri 「出ろ」 (13) a. miyaa 「飲まない」 b. mii 「見ろ」

- (14) 動詞語幹形式：「出る」ijir-, 「見る」miy-/mi-  
接辞形式：否定-aa, 命令-i  
語幹「見る」異形態分布（後続接辞）：否定接辞の前 miy-, 命令接辞の前 mi-
- (15) 動詞語幹形式：「出る」idzir-, 「見る」mi-  
接辞形式：否定-aa/-yaa, 命令-i  
否定接辞異形態分布（先行語幹末音）：母音の後-yaa, 子音の後-aa

### 3 動詞・形容詞の活用

本節では動詞・形容詞の活用について記述する<sup>6</sup>。

形態論的振る舞いのうち、動詞による大きな相違として、非過去接辞の異形態がある。存在動詞 ar-「ある」/ur-「いる」に後接する非過去接辞の異形態は-iであるのに対し、その他の動詞に後続する非過去接辞の異形態は-yui/-uiである<sup>7</sup>（以下例参照）。非過去接辞の異形態-yui/-uiをとる動詞をタイプ I, -iをとる動詞をタイプ IIと呼ぶことにする。

- (1) a. u-i（いる-非過去）, a-i（ある-非過去）  
b. u-yui（売る-非過去）, num-yui（飲む-非過去）, p<sup>h</sup>us-ui（干す-非過去）

以下 3.1 では、まずタイプ I について、語幹末音とその交替のパターンにもとづいて動詞クラスに下位区分し、語例を示す。次に、3.2 では、動詞の内部構造について記述し、語例を示す。3.3 では、タイプ II の動詞及び形容詞の活用を扱う。

#### 3.1 語幹クラスと語例

小野津方言の動詞は、本稿での分析方針に従えば、二つから四つの異形態を示すものがある<sup>8</sup>。よって A 語幹/B 語幹/C 語幹/D 語幹の四つの語幹を立て<sup>9</sup>、この四つの語幹の末尾音の交替パターンごとに、動詞クラスを設ける。ただし、語幹末が子音連続（または重子音）C<sub>i</sub>C<sub>j</sub>の場合、語幹末の C<sub>j</sub>が単子音を語幹末に持つクラスと同じ交替を示す場合は、C<sub>j</sub>の交替に応じて C<sub>i</sub>が同化交替を起こしても、独立したクラスは設けない（次頁表の m/d クラスの「頼む」、「埋める」、k/ç クラスの「歩く」、「動く」を参照）。動詞クラスは動詞タイプの下位区分として位置づける。B 語幹及び C 語幹は A 語幹から予測可能であるため、動詞クラスの呼び名には、「A 語幹末音/D 語幹末音」を用いることとする。

次頁にタイプ I の動詞クラスの一覧と語幹例を示す。表に示すように、本稿では 25 のクラスを認める。A~D 語幹の異同のパターンとしては、ABC/D, A/BCD, AB/C/D, A/BC/D, A/B/C/D の五つのパターンが見られる。

<sup>6</sup> 巻末に補足資料として用例を示す。

<sup>7</sup> この相違に対し、非状態動詞の非過去形が通時的には「連用形+フリ（存在動詞）」に由来する形であるという歴史的説明が適用できる（服部 1959: 334-338 参照）。

<sup>8</sup> ただし、k<sup>h</sup>ur/çç クラス「来る」は命令形と条件形で一部不規則な語形変化を示す（後述）。

<sup>9</sup> A 語幹, C 語幹, D 語幹はいわゆる基本語幹, 連用語幹, 音便語幹に相当する。



表 3 タイプ I 動詞クラス一覧

語幹 クラス		語幹異形態				語幹例（語幹「意味」）
		A	B	C	D	
1	pp/tt	Xpp-			Xtt-	app-/att-「遊ぶ」（1例のみ）
2	b/d	Xb-			Xd-	t <sup>h</sup> ub-/t <sup>h</sup> ud-「飛ぶ」, narab-/narad-「並ぶ」
3	bb/tt	Xbb-			Xtt-	habb-/hatt-「被る」, nibb-/nitt-「眠る」
4	bb/č	Xbb-			Xčč-	kubb-/kučč-「括る」（1例のみ）
5	m/d	Xm-			Xd-	num-/nud-「飲む」, k <sup>h</sup> am-/k <sup>h</sup> ad-「食べる」, t <sup>h</sup> amm-/t <sup>h</sup> and-「頼む」, umm-/und-「埋める」
6	t/čč	Xt-		Xč-	Xčč-	ut-/uč-/učč-「打つ」, mat-/mač-/mačč-「待つ」
7	jj/tt	Xjj-			Xtt- (~Xčč)	hijj-/hitt-(~hičč-)「削る」, p <sup>h</sup> ajj-/p <sup>h</sup> att-(~p <sup>h</sup> ačč-)「外す, 脱ぐ」
8	s/č	Xs-			Xč-	noos-/nooč-「治す」 us-/uč-「押す」, p <sup>h</sup> us-/p <sup>h</sup> uč-「干す」,
9	k/č	Xk-			Xč	yak-/yač-「焼く」, kik-/kič-「聞く」, akk-/ačč-「歩く」, iŋk-/iŋč-「動く」
10	k/ĵ	Xk-			Xĵ-	ik-/iĵ-「行く」（1例のみ）
11	ŋ/ĵ	Xŋ-			Xĵ-	huŋ-/huĵ-「漕ぐ」, siŋ-/siĵ-「死ぬ」, ooŋ-/ooĵ-「扇ぐ」
12	ŋŋ/nt	Xŋŋ-			Xnt-	mīŋŋ-/mīnt-「回る」（1例のみ）
13	ŋŋ/nč	Xŋŋ-			Xnč-	niŋŋ-/niŋč-「握る」, t <sup>h</sup> uŋŋ-/t <sup>h</sup> uŋč-「跳ぶ」, t <sup>h</sup> aŋŋ-/t <sup>h</sup> aŋč-「沸騰する」
14	ar/a	Xar-	Xa-			arar-/ara-「洗う」, har-/ha-「借りる」, k <sup>h</sup> aar-/k <sup>h</sup> aa-「掛かる」
15	ur/u	Xur-	Xu-			ur-/u-「売る」, kuur-/kuu-「閉める」, t <sup>h</sup> uur-/t <sup>h</sup> uu-「通る」
16	or/o	Xor-	Xo-			hoor-/hoo-「買う」, noor-/noo-「治る」
17	or/oč	Xor-	Xo-	Xoč-	misoor-/misoo-/misooč-「召し上がる」, umoor-/umoo-/umooč-「行く／来る（尊敬語）」	
18	ir/i	Xir-	Xi-			iĵir-/iĵi-「出る」, hir-/hi-「蹴る」
19	īr/ī	Xīr-	Xī-			humīr-/humī-「褒める」, wīir-/wīi-「起きる」
20	er/e	Xer-	Xe-			useer-/usee-「教える」, p <sup>h</sup> udeer-/p <sup>h</sup> udee-「育つ」
21	ēr/ē	Xēr-	Xē-			wēēr-/wēē-「分ける」, k <sup>h</sup> ēēr-/k <sup>h</sup> ēē-「掛ける」
22	i/ič	Xi-			Xič-	mi-/mič-「見る」, ni-/nič-「煮る」, ki-/kič-「着る」, i-/ič-「言う」
23	i/ičč	Xi-			Xičč-	i-/ičč-「入る」, si-/sičč-「知る」
24	sir/ss	sir-	si-	s-	(s)s-	sir-/si-/s)s-「する」（1例のみ）
25	k <sup>h</sup> ur/čč	k <sup>h</sup> ur-	k <sup>h</sup> u-	k <sup>h</sup> -	(č)č-	k <sup>h</sup> ur-/k <sup>h</sup> u-/k <sup>h</sup> č-「来る」（1例のみ）

一つの A 語幹末音に対して複数のクラスが認められるものには、歴史的要因が指摘できるものがある。bb/tt, bb/tte, ŋŋ/nt, ŋŋ/nte の各語幹クラスについて、歴史的には \*kabur->habb-, \*kubir->kubb-, \*megur->miŋŋ-, \*nigir->piŋŋ-のように語末が狭母音+rだったものが重子音化したと考えられるが、脱落した母音が\*uの場合はD語幹末が非口蓋化音のtに、脱落した母音が\*iの場合はD語幹末が口蓋化音のteになっている。k/jクラスについて、服部四郎(1955: 334)は、首里方言の動詞ik-「行く」の過去形が「往ぬ」からの補充形に由来する可能性を示している。また、or/oteクラスに含まれる動詞は尊敬動詞であるが、首里方言の尊敬動詞について一部補充法が見られることが指摘されている(西岡2002)。小野津方言においても同様の歴史的説明が可能である。

次頁の表にA語幹とB語幹の語例を、次々頁の表にC語幹とD語幹の語例を示す。

A語幹には否定接辞-(y)aa, 命令接辞-ī/-i, 意志勧誘接辞-(y)ooなどが後続する。否定接辞-(y)aaおよび意志勧誘接辞-(y)ooについて、子音に後続する場合にはそれぞれyを伴わない-aa/-ooで、母音iに後続する場合はそれぞれ接辞初頭にyが挿入された異形態-yaa/-yooで現れる。命令接辞-īは両唇音/軟口蓋音に後続する場合はīで、歯茎音/歯茎硬口蓋音/母音に後続する場合は異形態-iで現れる。また、「来る」の命令形はk<sup>h</sup>uuという不規則な形式になる<sup>10</sup>。

B語幹に後接する屈折接辞は禁止接辞-*nna*/-*una*のみが確認されている。子音の後には-*una*が、母音の後には異形態-*nna*が分布する。

C語幹には、非過去接辞-(y)ui, 同時接辞-(y)aaruu, 不定接辞-*i*/-*ii*/- $\phi$ など<sup>11</sup>が後続する。非過去接辞-(y)ui及び同時接辞-(y)aaruuは、母音に後続する場合はそれぞれyを保った-yui/-yaaruで、子音に後続する場合はそれぞれyが削除された-*ui* /-*aaruu*で現れる。不定接辞の-*i*は、単子音語幹の後では異形態-*ii*で現れ、二モーラ以上の長さで末尾に前舌母音/中舌母音を持つ語幹<sup>12</sup>の後ではゼロになり、それ以外の環境では-*i*として現れる。

D語幹には、過去接辞-(*t*)a, 継起接辞-(*t*)iなどが後続する。母音に後続する場合は接辞初頭の子音を保った-*ta*/-*ti*で、子音に後続する場合は接辞初頭のtが脱落した-*a*/-*i*で現れる。jj/ttクラスの語幹末音にはttとččの両方が見られる。sir/ssクラスとk<sup>h</sup>ur/ččクラスの( )の子音は、先行形式の末尾が母音の場合に現れる。

<sup>10</sup> この他の不規則性として、条件形がk<sup>h</sup>uubaになる点、非過去接辞にさらに接辞が後接する場合、開音節であれば非過去接辞が長母音化する点(例k<sup>h</sup>-yuu-roo 来る-非過去-推量I「来るだろう」, cf. num-yu-roo 飲む-非過去-推量I「飲むだろう」)が挙げられる。

<sup>11</sup> この他、C語幹に後接する接辞として目的接辞-(*i*)jpaがあり、母音に後続する場合は異形態-jpaで、子音に後続する場合は-ijpaで現れる(例num-ijpa 飲む-目的「飲みに」, ara-jpa 洗う-目的「洗いに」, mi-jpa 見る-目的「見に」)。

<sup>12</sup> ir/iクラスの語幹でも、一モーラ語幹の場合音形を伴った接辞が現れる(例hi-i 蹴る-不定)。ただし、ir/iクラスで語頭の分節音の脱落によって一モーラ化した語幹の場合-iと- $\phi$ の両方が見られる(例\*sute > ti-i ~ ti- $\phi$  捨てる-不定, \*cuke > ki-i ~ ki- $\phi$  付ける-不定)。



表 4 A 語幹/B 語幹語例

語幹 クラス	機能	A 語 幹	否定	命令	意志勧誘	B 語 幹	禁止
	異形態		-(y)aa	-i/-i	-(y)oo		-una/-nna
	意味		～しない	～しろ	～しよう		～するな
pp/tt	遊ぶ	Xpp-	app-aa	app-i	app-oo	Xpp-	app-una
b/d	飛ぶ	Xb-	t <sup>h</sup> ub-aa	t <sup>h</sup> ub-i	t <sup>h</sup> ub-oo	Xb-	t <sup>h</sup> ub-una
bb/tt	被る	Xbb-	habb-aa [haḅba:]	habb-i [haḅb <sup>v</sup> i]	habb-oo [haḅbo:]	Xbb-	habb-una [haḅbuna]
bb/č	括る	Xbb-	kubb-aa [k <sup>2</sup> uḅba:]	kubb-i [k <sup>2</sup> uḅb <sup>v</sup> i]	kubb-oo [k <sup>2</sup> uḅbo:]	Xbb-	kubb-una [k <sup>2</sup> uḅbuna]
m/d	飲む	Xm-	num-aa	num-i	num-oo	Xm-	num-una
t/čč	打つ	Xt-	ut-aa	ut-i	ut-oo	Xt-	ut-una
jj/tt	削る	Xjj-	hiĵj-aa [çit <sup>2</sup> dza:]	hiĵj-i [çiit <sup>2</sup> dzi]	hiĵj-oo [çit <sup>2</sup> dzo:]	Xjj-	hiĵj-una [çit <sup>2</sup> dzuna]
s/č	押す	Xs-	us-aa	us-i [uçi]	us-oo	Xs-	us-una
k/č	焼く	Xk-	yak-aa	yak-i	yak-oo	Xk-	yak-una
k/j	行く	Xk-	ik-aa	ik-i	ik-oo	Xk-	ik-una
ŋ/j	漕ぐ	Xŋ-	huŋ-aa	huŋ-i	huŋ-oo	Xŋ-	huŋ-una
ŋŋ/nt	回る	Xŋŋ-	mīŋŋ-aa	mīŋŋ-i	mīŋŋ-oo	Xŋŋ-	mīŋŋ-una
ŋŋ/nč	握る	Xŋŋ-	ŋiŋŋ-aa	ŋiŋŋ-i	ŋiŋŋ-oo	Xŋŋ-	ŋiŋŋ-una
ar/a	洗う	Xar-	arar-aa	arar-i	arar-oo	Xa-	ara-nna
ur/u	売る	Xur-	ur-aa	ur-i	ur-oo	Xu-	u-nna
or/oo	買う	Xor-	hoor-aa	hoor-i	hoor-oo	Xo-	hoo-nna
or/oč	召し上 がる	Xor-	misoor-aa	misoor-i	—	Xo-	misoo-nna
ir/i	出る	Xir-	iĵir-aa	iĵir-i	iĵir-oo	Xi-	iĵi-nna
ir/i	褒める	Xir-	humir-aa	humir-i	humir-oo	Xi-	humir-nna
er/e	教える	Xer-	useer-aa	useer-i	useer-oo	Xe-	useer-nna
er/č	分ける	Xer-	wēer-aa	wēer-i	wēer-oo	Xe-	wēer-nna
i/ič	見る	Xi-	mi-yaa	mi-i	mi-yoo	Xi-	mi-nna
i/ičč	入る	Xi-	i-yaa	i-i	i-yoo	Xi-	i-nna
sir/ss	する	sir-	sir-aa	sir-i	sir-oo	si-	si-nna
k <sup>h</sup> ur/čč	来る	k <sup>h</sup> ur-	k <sup>h</sup> ur-aa	k <sup>h</sup> uu	k <sup>h</sup> ur-oo	k <sup>h</sup> u-	k <sup>h</sup> u-nna

表 5 C 語幹/D 語幹語例

語幹 クラス	C 語 幹	非過去	同時	不定	D 語 幹	継起	過去
		-(y)ui	-(y)aanuu	-i/-ii/-φ		-(t)i	-a/-ta
		～する	～しながら	～し		～して	～した
pp/tt	Xpp-	app-yui	app-yaaruu	app-i	Xtt-	att-i	att-a
b/d	Xb-	t <sup>h</sup> ub-yui	t <sup>h</sup> ub-yaaruu	t <sup>h</sup> ub-i	Xd-	t <sup>h</sup> ud-i	t <sup>h</sup> ud-a
bb/tt	Xbb-	habb-yui [hap <sup>j</sup> ˦b <sup>j</sup> ui]	habb-yaaruu [hap <sup>j</sup> ˦b <sup>j</sup> a:ru:]	habb-i [hap <sup>j</sup> ˦b <sup>j</sup> i]	Xtt-	hatt-i	hatt-a
bb/č	Xbb-	kubb-yui [k <sup>ʔ</sup> up <sup>j</sup> ˦b <sup>j</sup> ui]	kubb-yaaruu [k <sup>ʔ</sup> up <sup>j</sup> ˦b <sup>j</sup> a:ru:]	kubb-i [k <sup>ʔ</sup> up <sup>j</sup> ˦b <sup>j</sup> i]	Xčč-	kučč-i [k <sup>ʔ</sup> uʦtɕi]	kučč-a [k <sup>ʔ</sup> uʦtɕa]
m/d	Xm-	num-yui	num-yaaruu	num-i	Xd-	nud-i	nud-a
t/čč	Xč-	uč-ui	uč-aaruu	uč-i	Xčč-	učč-i [uʦtɕi]	učč-a [uʦtɕa]
jj/tt	Xjj-	hijj-ui [çid <sup>j</sup> ˦dzui]	hijj-aaruu [çid <sup>j</sup> ˦dza:ru:]	hijj-i [çid <sup>j</sup> ˦dzi]	Xtt- Xčč-	hitt-i hičč-i [çitʦtɕi]	hitt-a hičč-a [çitʦtɕa]
s/č	Xs-	us-ui	us-aaruu	us-i [uɕi]	Xč-	uč-i	uč-a
k/č	Xk-	yak-yui	yak-yaaruu	yak-i	Xč	yač-i	yač-a
k/ʃ	Xk-	ik-yui	ik-yaaruu	ik-i	Xʃ-	iʃ-i	iʃ-a
ŋ/ʃ	Xŋ-	huŋ-yui	huŋ-yaaruu	huŋ-i	Xʃ-	huʃ-i	huʃ-a
ŋŋ/nt	Xŋŋ-	mīŋŋ-yui	mīŋŋ-yaaruu	mīŋŋ-i	Xnt-	mīnt-i	mīnt-a
ŋŋ/ɲč	Xŋŋ-	ɲiŋŋ-yui	ɲiŋŋ-yaaruu	ɲiŋŋ-i	Xɲč-	ɲiɲč-i	ɲiɲč-a
ar/a	Xa-	ara-yui	ara-yaaruu	ara-i	Xa-	ara-ti	ara-ta
ur/u	Xu-	u-yui	u-yaaruu	u-i	Xu-	u-ti	u-ta
or/o	Xo-	hoo-yui	hoo-yaaruu	hoo-i	Xo-	hoo-ti	hoo-ta
or/oč	Xo-	misoo-yui	misoo-yaaruu	misoo-i	Xoč-	misooč-i	misooč-a
ir/i	Xi-	iʃi-yui	iʃi-yaaruu	iʃi-φ	Xi-	iʃi-ti	iʃi-ta
īr/ī	Xī-	humī-yui	humī-yaaruu	humī-φ	Xi-	humī-ti	humī-ta
er/e	Xe-	usee-yui	usee-yaaruu	usee-φ	Xe-	usee-ti	usee-ta
ēr/ē	Xē-	wēē-yui	wēē-yaaruu	wēē-φ	Xē-	wēē-ti	wēē-ta
i/ič	Xi-	mi-yui	mi-yaaruu	mi-i	Xič-	mič-i	mič-a
i/ičč	Xi-	i-yui	i-yaaruu	i-i	Xičč-	ičč-i	ičč-a
sir/ss	s-	s-ui	s-aaruu	s-ii	(s)s-	(s)s-i	(s)s-a
k <sup>h</sup> ur/čč	k <sup>h</sup> -	k <sup>h</sup> -yui	k <sup>h</sup> -yaaruu	k <sup>h</sup> -ii	(č)č	(č)č-i	(t)č-a

### 3.2 形態的構造と語例

本節では動詞の構造について述べ、動詞「飲む」を例に活用形を示す。本稿では動詞の活用形のうち、主節及び単文の主動詞として機能しうるものを定動詞、名詞句に前置され、これを修飾する機能を持つものを連体動詞、動詞句（及び節）に先行し、これを副詞的に修飾する機能を持つ動詞を副動詞と呼ぶ。

まず、定動詞について、以下表に語形変化を示す。意志形の形態素境界での交替は否定形に準じる。直説法の動詞は、後続する文末助詞によって複数の形式が見られる。次頁の表に例を示す。また、強調形は、焦点助詞=du を含む文にに用いられる（例 *ari=ŋa=du nud-a-ru* 彼=主格=焦点 飲む-過去-強調）。

表 6 定動詞語形変化表

機能ラベル（日本語訳例）		接辞形式	語幹	語例「飲む」
命令（しろ）		-i/-i	A	num-i
禁止（するな）		-una/-nna	B	num-una
意志（しよう）		-(y)a	A	num-a
意志勧誘（しよう）		-(y)oo	A	num-oo
直説 (する)	非過去	-(y)ui	C	num-yui
		-(y)un	C	num-yun
	否定—非過去	-(y)aa-φ	A	num-aa-φ
		-(y)an-φ	A	num-an-φ
	過去	-(t)i	C	nud-i
		-(t)a	C	nud-a
		-(t)an	C	nud-an
	否定—過去	-(y)an-ti	A	num-an-ti
		-(y)an-ta	A	num-an-ta
-(y)an-tan		A	num-an-tan	
推量1 (するだろう)	非過去	-(y)u-roo	C	num-yu-roo
	過去	-(t)a-roo	D	nud-a-roo
	否定—過去	-(y)an-ta-ro	A	num-an-ta-roo
推量2 (するだろう)	過去	-(t)a-ra	D	nud-a-ra
	否定—過去	-(y)an-ta-ra	A	num-an-ta-ra
強調	非過去	-(y)u-ru	C	num-yu-ru
	否定—非過去	-(y)an-φ-u	A	num-an-φ-u
	過去	-(t)a-ru	D	nud-a-ru
	否定—過去	-(y)an-ta-ru	A	num-an-ta-ru

表 7 直説法動詞と文末助詞<sup>1 3</sup>

分布	非過去	非過去否定	過去
単独	num-yui	num-aa	nud-i
断定助詞	num-yun=doo	num-an=doo	nud-an=doo
真偽疑問助詞	num-yun=na	num-an=na	nud-i=na
疑念助詞	num-yuk=kai	num-an=kai	nud-a=kai

定動詞の構造は、以下(2)のように一般化できる<sup>1 4</sup>。定動詞はムード接辞／テンス接辞のいずれか一方のみが語末に置かれる構造を持つ場合と、テンス接辞に後続してさらにムード接辞が語末に置かれる構造を持つ場合がある。

- (2) 定動詞の構造：
- a. 語幹 — ムード接辞
  - b. 語幹 — 極性接辞 — テンス接辞
  - c. 語幹 — 極性接辞 — テンス接辞 — ムード接辞

次に、連体動詞は、テンスを取った定動詞に連体接辞-nを後接させて作られる<sup>1 5</sup>。連体動詞の語形変化と構造は以下の通りである。

表 8 連体動詞語形変化表

機能ラベル		接辞形式	語幹	語例「飲む」
連体	非過去	-(y)u-n	C	num-yu-n
	否定—非過去	-(y)an-φ-φ	A	num-an-φ-φ
	過去	-(t)a-n	D	nud-a-n
	否定—過去	-(y)an-ta-n	A	num-an-ta-n

- (3) 連体動詞の構造：語幹 — 極性接辞 — テンス接辞 — 連体接辞

次頁に副動詞の語形変化と構造を示す。並列接辞及び状況接辞の形態音韻論的交替は過去接辞に、条件接辞の交替は命令接辞に、否定理由接辞の交替は否定接辞にそれぞれ準じる（目的接辞の交替は注 10 参照）。否定接辞と共起するかどうかは、副動詞接辞によって決まっており、条件接辞-(i)ba 及び並列接辞-(t)ai は否定接辞と共起する。

<sup>1 3</sup> ここに挙げた=doo, =na/=na, =kai は、名詞述語においては名詞に後接しうるため、動詞接辞ではなく文末助詞として分析している。

<sup>1 4</sup> 極性接辞のロットは否定接辞で占められて否定が標示されるか、空のままで肯定を表す。後者の場合、煩雑さを避けるためゼロ標示 (-φ-) は行わない。

<sup>1 5</sup> 連体接辞は、話者及び動詞（／形容詞）によっては母音 u を伴って非過去-(y)u-nu（タイプ I では-φ-nu）、否定非過去 -(y)an-φ-u、過去-(t)a-nu の形で現れることがある。

表 9 副動詞語形変化表

機能ラベル (日本語訳例)		接辞形式	語幹	語例「飲む」
不定 (し)		-i/-ii/-φ	C	num-i
目的 (しに)		-(i)ɲna	C	num-iɲna
同時 (しながら)		-(y)aanuu	A	num-yaaruu
継起 (して)		-(t)i	D	nud-i
並列 (したり)	並列	-(t)ai	D	nud-ai
	否定—並列	-(y)an-tai	A	num-an-tai
条件 (すれば)	非過去	-iba/-iba	A	num-iba
	否定	-(y)an-ba	A	num-an-ba
状況 (したら)	過去	-(t)ariba	D	nud-ariba
	否定—過去	-(y)an-tariba	A	num-an-tariba
否定理由 (しないから)		-(y)adana	A	num-adana

- (4) 副動詞の構造： a. 語幹 — 副動詞接辞  
b. 語幹 — 極性接辞 — 副動詞接辞

### 3.3 タイプ II 及び形容詞の活用

本節では、タイプ II の動詞及び形容詞の活用について記述する。形容詞は語根に形容詞化接辞-sa が後接した形式をとる。t<sup>h</sup>aa-sa「高い」のように-sa のみが後接した形式も平叙文の述語に用いる<sup>16</sup>が、さらに動詞と同じ接辞をとってタイプ II の動詞に準じた活用も示す。ただし、否定形は持たず、-sa 形と状態動詞の否定形 nee (動詞「ある」の否定形 nee と同形) によって分析的に標示する (例 t<sup>h</sup>aa-sa nee「高くない」)。

以下の二つの表に存在動詞「いる」、「ある」と形容詞「高い」を例にタイプ II の動詞と形容詞の語形変化を示す。タイプ I との相違点として、前述のように直接法で非過去形が-(y)ui ではなく-i となるほか、非過去接辞にムード接辞及び連体接辞が後接する場合に非過去がゼロになる。存在動詞「ある」の否定形には nee という補充形が用いられる。

<sup>16</sup> -sa 形を用いた文の特徴として、主語が属格助詞=nu でも標示されうる (例 haʃi=nu ču-sa 風=属格 強い-形容詞化, haʃi=ɲa ču-sa 風=属格 強い-形容詞化 cf. haʃi=ɲa ču-sa-i 風=主格 強い-形容詞化-非過去 \*haʃi=nu ču-sa-i 風=属格 強い-形容詞化-非過去)。

表 10 タイプ II 動詞／形容詞語形変化表 1

機能ラベル		接辞形式	語幹	語例		
				「いる」	「ある」	「高い」
命令		-i	A	ur-i	—	—
禁止		-nna	B	u-nna	—	—
意志		-a	A	ur-a	—	—
意志勧誘		-oo	A	ur-oo	—	—
直説	非過去	-i	C	u-i	a-i	t <sup>h</sup> aa-sa-i
		-n	C	u-n	a-n	t <sup>h</sup> aa-sa-n
	否定—非過去	-aa-φ	A	ur-aa-φ	nec	—
		-an-φ	A	ur-an-φ	nen	—
	過去	-ti	C	u-ti	a-ti	t <sup>h</sup> aa-sa-ti
		-ta	C	u-ta	a-ta	t <sup>h</sup> aa-sa-ta
		-ta	C	u-tan	a-tan	t <sup>h</sup> aa-sa-tan
	否定—過去	-an-ti	A	ur-an-ti	nen-ti	—
		-an-ta	A	ur-an-ta	nen-ta	—
		-an-tan	A	ur-an-tan	nen-tan	—
推量 1	非過去	-φ-roo	C	u-φ-roo	a-φ-roo	t <sup>h</sup> aa-sa-φ-roo
	過去	-ta-roo	D	u-ta-roo	a-ta-roo	t <sup>h</sup> aa-sa-ta-roo
	否定—過去	-an-ta-roo	A	u-ran-ta-roo	nen-ta-roo	—
推量 2	過去	-ta-ra	D	u-ta-ra	a-ta-ra	t <sup>h</sup> aa-sa-ta-roo
	否定—過去	-an-ta-ra	A	u-ran-ta-ra	nen-ta-ra	—
連体	非過去	-φ-n	C	u-φ-n	a-φ-n	t <sup>h</sup> aa-sa-φ-n
	否定—非過去	-an-φ-φ	A	ur-an-φ-φ	nen-φ-φ	—
	過去	-ta-n	D	u-ta-n	u-ta-n	t <sup>h</sup> aa-sa-ta-n
	否定—過去	-an-ta-n	A	ur-an-ta-n	nen-ta-n	—
不定		-i	C	u-i	a-i	—
継起		-ti	D	u-ti	a-ti	t <sup>h</sup> aasa-ti
並列	並列	-tai	D	u-tai	a-tai	t <sup>h</sup> aa-sa-tai
	否定—並列	-an-tai	A	ur-an-tai	nen-tai	—
条件	非過去	-iba	A	ur-iba	ar-iba	t <sup>h</sup> aa-sar-iba
	否定	-an-ba	A	ur-an-ba	nen-ba	—
状況	過去	-tariba	D	u-tariba	a-tariba	t <sup>h</sup> aa-sa-tariba
	否定—過去	-an-tariba	A	ur-an-tariba	nen-tariba	—
否定理由		-adana	A	ur-adana	needana	—



## 4 童話「うふかぶー（おおきなかぶ）」

本節では、小野津方言による童話「うふかぶー（おおきなかぶ）」を報告する。方言で子どもに語る昔話として自然なかたちにしたため、丁寧語は用いず、また伝聞助詞=či が用いられている。グロスの略号は巻末を参照されたい。

- (1) aji=ŋa                      k<sup>h</sup>abu-n+t<sup>h</sup>anii                      mač-an=či  
おじいさん=NOM    カブ-LNK-種.CM    蒔く -PST=REP  
おじいさんがかぶのたねをまきました。
- (2) amaa-sa-nu                      amaa-sa-nu                      k<sup>h</sup>abu=ŋi    nar-i=yoo.  
甘い-ADJ.NPST-ADN    甘い-ADJ.NPST-ADN    カブ=DAT    なる -IMP=SFP  
「あまいあまいかぶになれ。」
- (3) ubii-sa-nu                      ubii-sa-nu                      k<sup>h</sup>abu=ŋi    nar-i=yoo.  
大きい-ADJ.NPST-ADN    大きい-ADJ.NPST-ADN    カブ=DAT    なる -IMP=SFP  
おおきなおおきなかぶになれ。」
- (4) amaa-sa-nu                      ikiyui=nu    yuta-sa-nu  
甘い-ADJ.NPST-ADN    元気=GEN    良い-ADJ.NPST-ADN  
あまいげんきのよい
- (5) ippai    ubii-sa-nu                      k<sup>h</sup>abu=ŋa    dikī-tan=či  
とても 大きい-ADJ.NPST-ADN    カブ=NOM    できる -PST=REP  
とてつもなくおおきいかぶができました。
- (6) aji=ya                      k<sup>h</sup>abu=yoba    haŋar-oo=čči                      ss-an=či  
おじいさん=TOP    カブ=ACC    抜く -INT=QUOT    する -PST=REP  
おじいさんはかぶをぬこうとしました。
- (7) yoišo    k<sup>h</sup>orašo  
INTJ    INTJ  
「うんとこしょどっこいしょ。」
- (8) jammun    k<sup>h</sup>aboo                      haŋar-ar-aa  
けれど    カブ.TOP    抜く -POT-NEG.NPST  
ところがかぶはぬけません。
- (9) aji=ya                      ammaa                      abī-ti                      čč-an=či  
おじいさん=TOP    おばあさん    呼ぶ-SEQ    来る -PST=REP  
おじいさんはおばあさんをよんできました。

(10) amma=ŋa            ajii=yoba            p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ  
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、

(11) aji=ŋa            k<sup>h</sup>abu=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ  
 おじいさんがかぶをひっぱって。

(12) yoišo k<sup>h</sup>orašo  
 INTJ INTJ  
 「うんとこしょどっこいしょ。」

(13) asissimu k<sup>h</sup>aboo    haŋar-ar-aa  
 それでも カブ.TOP 抜く-POT-NEG.NPST  
 それでもかぶはぬけません。

(14) amma=ya            umaŋaa abi-ti        čč-an=či  
 おばあさん=TOP 孫 呼ぶ-SEQ 来る-PST=REP  
 おばあさんはまごをよんできました。

(15) umaŋaa=ŋa ammaa=yoba    p<sup>h</sup>ippa-ti  
 孫=NOM おばあさん=ACC 引っ張る-SEQ  
 まごがおばあさんをひっぱって、

(16) amma=ŋa            ajii=yoba            p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ  
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、

(17) aji=ŋa            k<sup>h</sup>abu=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ  
 おじいさんがかぶをひっぱって。

(18) yoišo k<sup>h</sup>orašo  
 INTJ INTJ  
 「うんとこしょどっこいしょ。」

(19) nakanaka k<sup>h</sup>aboo    haŋar-ar-aa  
 なかなか カブ.TOP 抜く-POT-NEG.NPST  
 まだまだかぶはぬけません。

- (20) umaŋaa=ya iŋŋaa abī-ti čč-an=či  
 孫=TOP イヌ 呼ぶ-SEQ 来る-PST=REP  
 まごはいぬをよんできました。
- (21) iŋŋaa=ŋa umaŋaa=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 イヌ=NOM 孫=ACC 引っ張る-SEQ  
 いぬがまごをひっぱって、
- (22) umaŋaa=ŋa ammaa=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 孫=NOM おばあさん=ACC 引っ張る-SEQ  
 まごがおばあさんをひっぱって、
- (23) amma=ŋa ajii=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ  
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、
- (24) aji=ŋa k<sup>h</sup>abu=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ  
 おじいさんがかぶをひっぱって。
- (25) yoišo k<sup>h</sup>orašo  
 INTJ INTJ  
 「うんとこしょどっこいしょ。」
- (26) nakanaka nakanaka haŋar-ar-aa  
 なかなか なかなか 抜く-POT-NEG.NPST  
 まだまだまだまだぬけません。
- (27) iŋŋaa=ya mayaa abī-ti čč-an=či  
 イヌ=TOP ネコ 呼ぶ-SEQ 来る-PST=REP  
 いぬはねこをよんできました。
- (28) mayaa=ŋa iŋŋaa=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 ネコ=NOM イヌ=ACC 引っ張る-SEQ  
 ねこがいぬをひっぱって、
- (29) iŋŋaa=ŋa umaŋaa=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 イヌ=NOM 孫=ACC 引っ張る-SEQ  
 いぬがまごをひっぱって、

- (30) umaŋaa=ŋa ammaa=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 孫=NOM おばあさん=ACC 引っ張る-SEQ  
 まごがおばあさんをひっぱって、
- (31) amma=ŋa aji=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ  
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、
- (32) aji=ŋa k<sup>h</sup>abu=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ  
 おじいさんがかぶをひっぱって。
- (33) yoišo k<sup>h</sup>orašo  
 INTJ INTJ  
 「うんとこしょどっこいしょ。」
- (34) asissimu k<sup>h</sup>aboo haŋar-ar-aa  
 それでも カブ.TOP 抜く-POT-NEG.NPST  
 それでもかぶはぬけません。
- (35) mayaa=ya kaakii abī-ti čč-an=či  
 ネコ=TOP ネズミ 呼ぶ-SEQ 来る-PST=REP  
 ねこはねずみをよんできました。
- (36) kaakii=ŋa mayaa=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 ネズミ=NOM ネコ=ACC 引っ張る-SEQ  
 ねずみがねこをひっぱって、
- (37) mayaa=ŋa iŋŋaa=yoba p<sup>h</sup>ippati  
 ネコ=NOM イヌ=ACC 引っ張る-SEQ  
 ねこがいぬをひっぱって、
- (38) iŋŋaa=ŋa umaŋaa=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 イヌ=NOM 孫=ACC 引っ張る-SEQ  
 いぬがまごをひっぱって、
- (39) umaŋaa=ŋa ammaa=yoba p<sup>h</sup>ippa-ti  
 孫=NOM おばあさん=ACC 引っ張る-SEQ  
 まごがおばあさんをひっぱって、

(40) amma=ŋa            ajii=yoba            p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ  
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、

(41) aji=ŋa            `    k<sup>h</sup>abu=yoba    p<sup>h</sup>ippa-ti  
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ  
 おじいさんがかぶをひっぱって。

(42) yoišo    k<sup>h</sup>orašo  
 INTJ    INTJ  
 「うんとこしょどっこいしょ。」

(43) yattukattu    k<sup>h</sup>aboo    haŋar-att-an=či  
 やっと    カブ.TOP 抜く-POT-PST=REP  
 やっとかぶはぬけました。

## 5 会話例

本節では、小野津方言による会話の例を報告する。一つ目は、早朝、友人の家に鋏を借りにいった場面の会話の例、二つ目は、夕方に鋏を返しに来た場面の会話の例、三つ目は、道で友人に久しぶりに出会った場面の会話の例である。前節同様、グロスの略号は巻末を参照されたい。

[朝の会話]

(1) α: hooi    hooi  
 おーい    おーい  
 おーい、おーい。

(2) β: akii    han+bëë-sa            t<sup>h</sup>aru=ka  
 INTJ    こんな+早い-ADJ    誰=Q  
 あれ、こんな早くに誰だろう？

(3) α : wan    ja=ŋa=yo  
 1.SG COP.NPST=ADVRS1=SFP  
 私だけど。

(4) β : nuŋassi=ya  
 なぜ=Q  
 どうしたの？

- (5) α: wanoo k<sup>h</sup>ora k<sup>w</sup>ëë=nu yii=ŋa uri-ti=yo=yaa  
 1.SG.TOP INTJ 鋏=GEN 柄=NOM 折れる-SEQ=DSC=DSC  
 私は、鋏の柄が折れてね、
- (6) α: k<sup>h</sup>yuu p<sup>h</sup>iččii har-ar-ak=ka=čči umu-ti k<sup>h</sup>-ii ja=ŋa  
 今日 一日 借りる-POT-NEG.NPST=Q=QUOT 思う-SEQ 来る-INF COP.NPST=ADVRS1  
 今日一日借りられないかと思って来たんだけど。
- (7) β: ee hagëë wanoo k<sup>h</sup>yuu=ya k<sup>w</sup>ëë=ya kar-an=karaji=yaa  
 INTJ INTJ 1.SG.TOP 今日=TOP 鋏=TOP 使う-NEG.NPST=CSL1=DSC  
 私は今日は鋏は使わないからね、
- (8) α: in  
 RES  
 うん。
- (9) β: mata wannaa k<sup>w</sup>ëë=ya ippai ka-i+yas-sa-n=karaji  
 また 1.EXCL.PL 鋏=TOP とても使う-不定+易い-ADJ-NPST=CSL1  
 また、うちの鋏はとても使いやすいから、
- (10) β: uda kar-iba  
 どうぞ 使う-COND  
 どうぞ使ったら。
- (11) α: assi=na  
 そう=YNQ  
 そうなの。
- (12) α: akī uri y-un=nee ippai ka-i+yas-sa-n=nessu-i=yaa  
 INTJ FIL 言う-NPST=ように とても 使う-INF+易い-NPST=ようだ-NPST=SFP  
 言う通りとても使いやすいそうだね。
- (13) α: assee k<sup>h</sup>yuu p<sup>h</sup>iččii ha-ti mata yundai=ŋi mučč-i k<sup>h</sup>-yu-ssa  
 じゃあ 今日 一日 借りる-SEQ また 夕方=DAT 持つ-SEQ 来る-NPST-CSL2  
 じゃあ、今日一日借りてまた夕方に持ってくるから。
- (14) β: in k<sup>h</sup>yaa=mu nen=doo.  
 RESP どう=ADD ない.NPST=ASRT  
 うん、構わないよ。



(15) α: aigatoo

ありがとう

ありがとう。

[夕方の会話]

(16) α: akiko+nee k<sup>h</sup>yuu=ya k<sup>w</sup>ëë aigatoosama

アキコ+姉 今日=TOP 鋏 ありがとう

アキコ姉, 今日は鋏ありがとう。

(17) β: naa anoo ari=na

FIL FIL あれ=YNQ

あれなの?

(18) β: anoo wannaa-soo yuu kar-att-an=doonja

FIL 1.EXCL.PL-NMLZ.TOP よく使う -POT-PST=SFP

うちのはよく使えたでしょう?

(19) α: ippai ka-i+yas-sa-tan=doo=wa

とても 使う -INF+易い -ADJ-PST=ASRT=SFP

とても使いやすかったよ。

(20) β: hagii da=ya nuu=nu kiba-i ss-a-su=yo

INTJ 2.SG=TOP 何=GEN 頑張る -INF する -PST-NMLZ=WHQ

あんた, 何の仕事をしたの?

(21) α: t<sup>h</sup>aŋkan=yoba=yoo nihon wii-yun=çiçi=yaa ana p<sup>h</sup>u-i+p<sup>h</sup>ajimī-tariba

タンカン=ACC=DSC 二本 植える -NPST=QUOT=DSC 穴 掘る -INF+始める -CIRC

タンカンをね, 二本植えるってね, 穴を掘り始めたら,

(22) α: iššaku=bëë ss-ariba naa isi+mamī=yo

一尺=APPR1 する -CIRC FIL 石+だらけ=SFP

一尺ぐらいしたらもう石だらけなのよ。

(23) β: hakii

INTJ

あれまあ。

- (24) α: ʃammun k<sup>w</sup>ëë=ŋa ippai ka-i+yas-sa-tan=nati yuka guwai na-tan=doo  
 だけど 鋤=NOM とても 使う-INF+易い-ADJ-PST=CSL3 良い 具合 なる-PST=ASRT  
 だけど、鋤がとても使いやすかったから、良い具合になったよ。
- (25) β: ee assi ar-iba nadee a-ta-soo=wa  
 INTJ そう COP-COND 良い COP-PST-SFS=SFP  
 ならよかったね。
- (26) α: in aigatoo  
 RESP ありがとう  
 うん、ありがとう。
- (27) β: mata ari s-u-n dukee icu=dimu har-i=yoo  
 また あれ する-NPST-ADN とき.TOP いつ=CONC 借りる-IMP=SFP  
 またあれするときはいつでも借りてね。
- (28) α: in aigatoo=yaa  
 RESP ありがとう=DSC  
 うん、ありがとうね。
- (29) β: anoo k<sup>h</sup>ora da=ya huma=ʃi wattai  
 FIL INTJ 2.SG=TOP ここ=LOC 1.DU.INCL  
 あんた、ここで二人で、
- (30) β: saa=dimu nud-i ik-an=na=yoo  
 茶=APPR2 飲む-SEQ 行く-NEG.NPST=YNQ=SFP  
 お茶でも飲んで行かないかね？
- (31) α: assi s-ii+bu-sa-n=mun ɲaa  
 そうする-INF+欲しい-ADJ-NPST=ADVRS2 FIL  
 そうしたいけど、
- (32) α: wan=mu mata yii sir-an-ba ik-an=nati=yaa  
 1.SG=ADD また 夕食 する-NEG-COND いける-NEG.NPST=CSL3=DSC  
 私もまた夕飯を作らないといけないからね。
- (33) α: mata=yaa dooka cugi=yaa  
 また=DSC どうか 次=SFP  
 またね、どうか次ね。

(34) β: ee assee mata icu=ka yukkuri saa num-yun=nen si-roo  
 INTJ じゃあ また いつ=INDEF ゆっくり 茶 飲む-NPST=ように する-HORT  
 じゃあ、またいつかゆっくりお茶を飲む機会を持とうね。

(35) α: in aigatoo  
 RESP ありがとう。  
 うん、ありがとう。

[夕方の会話]

(36) β: hagīi ujan+duu-saa nuuka=yo=wa  
 INTJ 拝む+遠い-ADJ.TOP なぜ=SFP=SFP  
 あらまあ、久しぶりだね。

(37) β: hagī ikkyaa-yu-n k<sup>h</sup>utu=mu a-soo=wa  
 INTJ 出会う-NPST-ADN こと=ADD ある.NPST-SFS=SFP  
 出会うこともあるんだね。

(38) β: icu=mu=yo=yaa k<sup>h</sup>yaasi ss-u-k=ka=čči  
 いつ=ADD=DSC=DSC どう する-PROG-NPST=Q=QUOT  
 いつも、どうしているかと、

(39) β: ippai ki=ni na-tu-tan=doo  
 とても 気=DAT なる-PROG-PST=ASRT  
 とても気になっていたよ。

(40) α: ittuki=yoo t<sup>h</sup>ookyoo i-ji čč-i=doo=yo  
 しばらく=DSC 東京 行く-SEQ 来る-SEQ=ASRT=SFP  
 しばらく東京に行ってきたんだよ。

(41) β: assi=nati=yaa  
 そう=CSL3=SFP  
 だからだね。

(42) β: hagēē waakya k<sup>h</sup>ora t<sup>h</sup>usi t<sup>h</sup>ur-iba  
 INTJ 1.INCL.PL INTJ 年 取る-COND  
 私たち、年取ったら

(43) β: ano ari yuu k<sup>h</sup>arada=ni an kii cukī-tu-ti  
 FIL FIL 良く 体=DAT FIL 気 付ける-PROG-SEQ  
 よく体に気をつけていて、

- (44) β: kibar-an-ba ik-aa=yaa  
 頑張る-NEG-COND いける-NEG.NPST=SFP  
 頑張らないといけないね、
- (45) β: amacukihumacuki t<sup>h</sup>usi t<sup>h</sup>ur-iba namaar-an=doo  
 あちこち 年 取る-COND 難儀しない-NEG.NPST=ASRT  
 (体の) あちこち、年取ると大変だよ。
- (46) α: assi ja=yaa  
 そう COP.NPST=SFP  
 そうだね。
- (47) α: nama yasee sikoo-i ss-u-n=na  
 今 野菜 作る-INF する-PROG-NPST=YNQ  
 今野菜作りしているの？
- (48) β: in naa ano ari  
 RESP FIL FIL FIL  
 うん、
- (49) β: huri=kusa ano hima+cubushi=ji ano yasee cuku-tu-n=doo  
 それ=こそ FIL 暇+潰し=DAT FIL 野菜 作る-PROG-NPST=ASRT  
 それこそ暇潰しに野菜を作っているよ。
- (50) α: mata=yaa wan=mu hora p<sup>h</sup>uyu+yasee siko-or-an-ba ik-an=si  
 また=DSC 1.SG=ADD INTJ 冬+野菜 作る-NEG-COND いける-NEG.NPST=CSL4  
 また、私も冬野菜を作らないといけないし、
- (51) α: mata nuuhii hatar-iba=yaa  
 また 何でも 教える-COND=SFP  
 また何でも教えてね。
- (52) β: in mata un dukee waakya=ji issu=ji ari sir-an=mun=wa  
 RESP また その とき.TOP 1.INCL.PL=INST 一緒=DAT あれ する-NEG.NPST=SFP=SFP  
 またそのときは私たちで一緒にしようね。
- (53) α: dooka dooka  
 どうか どうか  
 どうかどうか(お願いね)。

(54) β: assee mata=yaa  
 じゃあ また=SFP  
 じゃあまたね。

(55) α: in mata=yaa  
 RESP また=SFP  
 うん, またね。

## 補足資料

(1) num-ijna k<sup>h</sup>uu  
 飲む-PURP 来る .IMP  
 飲みに来い。

(2) sui num-iba noo-yui  
 薬 飲む-COND 治る-NPST  
 薬を飲めば治る。

(3) sui num-an-ba noor-aa  
 薬 飲む-NEG-COND 治る-NEG.NPST  
 薬を飲まなければ治らない。

(4) sui nud-ariba noo-ti  
 薬 飲む-CIRC 治る-PST  
 薬を飲んだら治った。

(5) sui num-an-tariba ya-di  
 薬 飲む-NEG-CIRC 痛む-PST  
 薬を飲まなかったら痛くなった。

(6) sui num-adana noor-aa  
 薬 飲む-NEG.CSL 治る-NEG.NPST  
 薬を飲まないから治らない。

(7) yaa=pi ur-iba oor-att-an=mun  
 家=DAT いる-COND 会う-POT-PST=SFP  
 家にいれば会えたのに。

(8) yaa=pi ur-an-ba oor-ar-aa  
 家=DAT いる-NEG-COND 会う-POT-NEG.NPST  
 家にいないと会えない。

(9) yaa=pi u-tariba t<sup>h</sup>akasi=ŋa čč-i  
 家=DAT いる-CIRC タカシ=NOM 来る-PST  
 家にいたらタカシが来た。

(10) yaa=pi ur-an-tariba t<sup>h</sup>akasi=tu oor-ar-an-ti  
 家=DAT いる-NEG-CIRC タカシ=COM 会う-POT-NEG-PST  
 家にいなかったからタカシと会えなかった。

(11) yaa=pi ur-adana oor-ar-aa  
 家=DAT いる-NEG.CSL 会う-POT-NEG.NPST  
 家にいないから会えない。

(12) t<sup>h</sup>aa-sar-iba hoor-aa  
 高い-ADJ-COND 買う-NEG.NPST  
 高ければ買わない。

(13) t<sup>h</sup>aa-sa-tariba ticu=mu urir-an-ti  
 高い-ADJ-COND 一つ=ADD 売れる-NEG-PST  
 高かったから一つも売れなかった。

### グロス略号一覧

1	first person	一人称	IMP	imperative	命令
2	second person	二人称	INCL	inclusive	包括
ACC	accusative	対格	INDEF	indefinitizer	不定化
ADD	additive	添加	INF	infinitive	不定形
ADJ	adjectivizer	形容詞化	INST	instrumental	具格
ADN	adnominal	連体	INT	intentional	意志
ADVRS	adversative	逆接	INTJ	interjection	感嘆詞
APPR	approximative	曖昧	LNK	linker	連結辞
ASRT	assertive	断定	LOC	locative	所格
CIRC	circumstantial	状況	NEG	negative	否定
CM	compound marker	複合標識	NMLZ	nominalizer	名詞化接辞
COM	comitative	共格	NOM	nominative	主格
CONC	concessive	譲歩	NPST	non-past	非過去
COND	conditional	条件	PL	plural	複数
COP	copula	コピュラ	POT	potential	可能
CSL	causal	理由	PST	past	過去
DAT	dative	与格	PURP	purposive	目的
DSC	discourse marker	談話標識	Q	question	疑問
DU	dual	双数	QUOT	quotative	引用
EXCL	exclusive	除外	REP	reportative	伝聞
FIL	filler	フィラー	RES	resultative	結果
GEN	genitive	属格	RESP	response	応答表現
HORT	hortative	勧誘	SEQ	sequential	継起



SFP	sentence final	文末助詞	WHQ	wh question	疑問詞疑問
	particle		YNQ	yes-no question	真偽疑問
SFS	sentence final	文末接辞	-		接辞境界
	suffix		=		接辞境界
SG	singular	単数	+		複合境界
TOP	topic	主題			

## 引用文献

- 上村幸雄（1972）「琉球方言入門」『言語生活』251: 20-37.
- \_\_\_\_\_（1992）「琉球列島の言語（総説）」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典世界言語編下2』771-814. 東京：三省堂.
- 上野善道（1995）「喜界島方言の活用形と複合名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』23: 151-236.
- 大野眞男（2002）「奄美方言における中舌母音の歴史的重層性」『国語研究』41: 78-69.
- \_\_\_\_\_（2003）「北奄美周辺方言の音韻の特徴」『岩手大学教育学部研究年報』63: 51-70.
- 木部暢子（2011）「喜界島方言の音韻」木部暢子・窪菌晴夫・下地賀代子・ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子著『国立国語研究所共同研究報告 11-01 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』12-50. 東京：国立国語研究所.
- \_\_\_\_\_（2012）「奄美喜界島方言の母音の特徴について」『国語研プロジェクトレビュー』3(1): 3-14
- 中本正智（1976）『琉球方言の音韻』東京：法政大学出版局.
- 西岡敏（2002）「沖縄語首里方言の敬語動詞「メンシェーン」の過去形」第4回「沖縄研究国際シンポジウム実行委員会（編）『世界に拓く沖縄研究』280-289. 沖縄：第4回「沖縄研究国際シンポジウム」事務局.
- 服部四郎（1955）.「文法」. 市河三喜・服部四郎（編）, 『世界言語概説（下）』328-352. 東京：研究社.
- \_\_\_\_\_（1959）『日本語の系統』東京：岩波書店.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智（1966）『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院.
- 松本幹男（2000）「沖永良部島方言と喜界島方言における中舌母音について」『語学研究』95: 169-173.